

はじめ

田森 龍

開拓者が続々と北海道に入って来た時代、三菱は北海道経済に基盤を固めつつあった。北海道経済は、函館や西海岸が中心で産業経済はほとんど成長することはなく、その当時は商業利益が中心だった。

北海の海運を独占していた三菱も商業的利益が中心だった。そんな北海道経済を動かす北海道庁は、開拓を推し進めるため内地資本を欲していた。

開拓使時代に北海道庁が呼んだアメリカ人技師ライマンと、その助手コンローは地質調査を依頼され北海道の密林に分け入った。帰ったライマンらは、北海道に石炭の在ることを報告していた。明治二十一年北海道庁技師坂市太郎が初めて夕張に来て石炭の露頭炭を発見、これにより次第に世間の注目を集めるようになった。

そんな中、明治二十二年北海道炭鉱鉄道株式会社は、幌内炭鉱や手宮（小樽）幌内間、幌内太業く幾春別間の鉄道を政府より払下げを受け、また幾春別・夕張・空知などの鉱区を譲り受けた。更に岩見沢く砂川く歌志内、砂川く空知太、室蘭く苫小牧く追分く岩見沢、追分く紅葉山く夕張の鉄道をほぼ明治二十五年までに完成させ、北海道の鉄道や炭田を独占していった。

明治二十三年には、北海道炭鉱鉄道株式会社が夕張炭鉱、明治四十年には石狩石炭株式会社の新夕張炭鉱が開かれた。

明治三十九年三月三十一日鉄道国有化法案が可決され公布されると、北海道炭鉱鉄道株式会社も北海道炭鉱汽船株式会社と改名した。北炭と親しまれ夕張の絶頂期を支えた会社である。

道庁で内地資本を求め、鉄道も国有化になった事で明治三十九年六月に、北炭の経営下の中の夕張の一角に、主夕張と呼ばれる地域があった。そこへ京都合資会社が姿を現した。

福山坑の試掘権を川崎繁實より買収したのである。（福山坑は、南大夕張付近であった）。

明治三十九年十月に夕張川上流に福山坑を開坑し、福山坑の北側十数町にある滝ノ

沢上流に良質な露頭炭を発見した。そこを滝ノ沢坑として開坑した。京都合資会社は滝ノ沢にその事務所を置き、その後この地域の名前を道議に掛け、大夕張と命名された。

明治三十九年九月、田中健二は丁度その頃京都合資会社の炭鉦の技師を務めていた。京都合資会社は清水沢に貯炭場を置き着々と準備を進めていた。しかし、夕張地域は大きく歪んだ断層地帯が多く、またガスの流出も頻繁だったので、田中健二はその安全な運営を考えるのに苦慮していた。

上司である山崎忠志は、二十五歳の若い田中健二の腕をかっていた。

「田中君、開坑の手立ては出来申したか」

「はい、なんとか来月には、予定通り掘れるさかいに」

「ところで田中君、仕事が終り申したら話があるけん、安田君と藤間君も呼んでいるし、久しぶりにいい酒を飲もう。青葉壮で待ってるばい」

「七時には仕事を終わらせるさかい。それから向かいます」と田中は言った。

田中健二は福山坑の担当主任で、安田誠は滝ノ沢坑の担当主任だった。藤間康弘は事務の会計を一手に引き受けていた。山崎は京都合資会社の大夕張地域の担当部長で、内地に顔が広く人望も厚かった。福山坑の試掘権の買収も山崎が携わっていた。山崎らのご馳走を用意して田中を待っていた。七時半頃田中は顔を出した。

「お待たせしました。やっ、なんやすかーこの料理は、凄いですねえ」

「田中君さっ、ここへすわーてください。
さあさあ、どうぞどうぞ」

「何か盆と正月が一辺に来たようでやすなあ。いったいどうしたってゆうんどすか」
「みんな頑張ってくれちよるから、ここまで来た。開坑前の祝いにごわす」と山崎が言った。

山では魚介類がなかなか食べられるものでは無かったが、魚や貝などが肴に置いてあり田中は目を疑った。

「これはどないして仕入れたんやすか・・・」
と田中は言った。

「色々ルートはあるとよ」と山崎は言った。

「上の方では、魚介類を食べていると聞いてましたが本当なんですなえ。私は食べるといえは熊の肉くらいやす」と田中は言った。

田中は坑夫の尋常ならぬ環境を知っていただけに、この料理は場違いとも思った。

「・・・」山崎と安田、藤間は目くばせをして頷いた。そして山崎が口火を切った。

「田中君、食べる前に話があるでござす、聞いてくれんか」

「そんな畏まってなんでっしやろう・・・」

「今この京都の会社で何が起きちゅうか分かり申すか」

「へえー、噂ですが独立するとかなんとかは、聞いた事がありますが・・・」

「そうか。それなら話はやいき。実は今日来てもらうたのは、その話でござすと山崎は声を低めて言った。

「とおっしやりますと・・・」と田中は言った。

「上層部の神沼宗次郎支配人は知っているな」

「はい、名前だけは、この現場の総指揮をとっていらっしやる方ですやろ」

「そんごつ。その方がこの炭鉱を買収する」

「この大夕張をやすか」と田中は驚いて言った。

「そうだ。その組に私たちは入っちよる。今、大夕張炭鉱株式会社の株式申請をしているでござす」

「そやけど何故・・・」

「神沼宗次郎支配人は、この炭鉱を京都合資会社から独立させ内地資本でない我々の手でこの夕張の地に根を下ろそうとしているんでござす」と山崎忠志は言った。そして続けた。

「それには、腕の良い技師と人夫が必要でござす。その人員は、京都合資会社が集めてくれる。それをそっくり買収するでござす。今その同意を取り付けているところで、安田君と藤間君も同意した仲間でござす」と山崎は言った。

「そやけど、そう簡単に事は運ぶのでっしやろか。これは反乱でっせ」と田中は言った。

「いやそれは、違う。これはビジネスと言うものじゃきに。そして経営方針が合わなければのつとつたって全てお金で解決出来るんじゃき」と藤間が言った。

「そうでござす。田中君が言うように、これは反乱かもしれねえ。しかし今選択しなければ我々の道は無いんでござす。仲間になってくれんばい」と言うと、山崎は豊に額を付けた。合わせるかのように、安田も藤間も土下座した。

「よして下さい。山崎はん安田はん藤間はん、あなたたちに頭下げられたら断られ

やしませんやろ」と田中は言った。

「じゃ、いいんでござすな。私たちの仲間になってくれるんとね」と山崎は念を押した。

「分かりやした。やりまひよ」と田中は了承した。田中は、まだ若かった。それ故に、もし坑夫らの待遇が改善されるならとも思った。しかし、坑夫らの処遇は、酷くなって行く。

それから一年足らずの明治四十年七月、大夕張炭鉱株式会社は資本金百五十万円(約十五億円)で立ち上げ、京都合資会社大夕張を買収、継承した。

また福山坑付近に新たに錦坑を開坑し、これを中核とし主な施設を拡大した。更に炭層の探査の結果、明治四十四年六月滝ノ沢の北ポンウエンホロカベツの溪谷に新たに若葉坑を開坑し、八月には採炭を開始した。

その間、明治四十三年清水沢く大夕張坑八キロの専用鉄道の敷設に着手し鉄道は順調に竣工して継続していった。

その頃、三菱合資会社は三代目岩崎久弥社長が北海道の大地に進出しようとしていた。

明治四十四年八月三菱合資会社内に臨時北海道調査課を設け、その本部を札幌に置くべく家屋を物色し、元北海道庁長官永山武四郎男爵が住んでいた土地や建物を明治末期に買収し調査の本部を置いた。

その後試掘権の出願で道内各地で試掘が行われ、鉱区の出願が行われていった。その一方で既設炭坑の投融資が行われ、次第に拡大して行き炭鉱網が敷かれていった。

明治四十年二月には久弥の長男である岩崎小弥太を副社長に迎え増資を行い、その資本は一千五百万円(約千五百億円)規模となり、その拡大を止められる者は今や誰もいなかった。

山崎忠志は大夕張の総監督をしていた。山崎は、設備の投資で採炭量を増やす事を考えていた。

明治三十七年の日露戦争を景気のピークとすると、その景気は次第に衰え明治四十年代は不況期に突入していた。石炭の単価もピーク時の半分以下に下落し、その穴を山崎は増産で埋めようとしていた。『坑夫も大量に増やさないと駄目だな…』と一人言を言いながら事務所に入って来た。

「藤間君どーたい。施設の増設の件上手く行きそうかい」と山崎が言った。

「えー、百五十万円（約十五億円）ほど足りてません。けど、これ以上の施設の増設は、会社の経営を圧迫しますきに」と藤間は言った。

「うーん。新しい機械も入れなくてはならんたい。坑夫もかなり増やさなければ・・・。飯場も、もう二つ新規で建てなければならんたい。この不景気を乗り越えるには、増産しかないんでござす・・・」

「なら、融資先を考えんばなりません」

「融資先なら考えがあつとばい。今や炭鉱は、担保には最高の物件たい。どこだつて貸してくれるたい」

「分かりました。その先は、どこじゃき」

「三菱でござす。今三菱では、北海道の炭鉱業に入り出してきてるたい。財閥の三菱がバックについてくれれば、鬼に金棒でござす」

「そうですか。分かりました。山崎さんにお任せするきに。神沼社長はなんとおっしゃっているんですかのー」

「来月、東京の三菱本社へ行く事になってるたい」

「話が上手く行くことを願ってます」

「施設増設と生産量の金額を出してくれたかい」

「はい。これが書類やき」

「ありがとー。ほぼ話は、固まっている。行って来るたい」

「お気をつけて・・・」

「田中も連れて行く事にしたでござす。奴にも、もう少し広い世界を見せたいと思つてな・・・」

一カ月後の金曜日、山崎忠志等は駅にいた。その傍らに田中健二がいた。その横に出納係の曾根順三がいた。そこに安田、藤間と数人の役員の人があった。

「気いつけて行って来てください。無事に帰って来ることがお土産ですさかい」と安田が言った。

「留守中ば、我々がしっかり守つとりますから」と藤間が言った。

「山崎君、社長は東京で合流するらしい。よろしく頼むよ」と役員の一人が言った。

汽笛が鳴った。機関車は、石炭を清水沢まで運ぶのに使われていたが、一両だけ客

車を繋げていた。東京までは函館の連絡船に上手く乗り継げると片道三日間程の旅だった。

汽車は清水沢で乗り換えて、札幌行きへ乗る。一端追分で待ち時間はあるが、それでも四時間程で札幌へ到着した。

札幌からは、旭川から来る列車に乗り換える。そして函館まで小樽経由で十二時間程列車に揺られ函館に到着する。

函館からは、月に三日程しか往復していなかった連絡船だが、明日出航する船があるとの事で、港の待合室でその出航を三人は待っていた。

田中は、大夕張の事を考えていた。やはり無理があったのだろうか。坑夫たちにも随分無理を言った事を思い出していた。

翌朝十時に船は出航した。船はしらす丸で潮風を切る船の上で田中は、初めて津軽海峡を渡った頃の事を思い出した。『京都合資会社時代、技術者として渡航したが、今は大夕張炭坑社に移行して今度は三菱に融資を求めようとしている。一体この大夕張という炭鉱は何処へ行くのだろうか』

船は、四時間半の船旅で津軽海峡を渡った。

東北本線は青森発が一九時三〇分があった。下船から手続き移動まで色々あって一六時頃に青森港の待合室に着いた。

「三時間半程で列車が来るべ。ホームへ行ってるべき」と曾根順三が言った。

すると山崎が「そうだな、もう行つとるか」とちょっと疲れた顔で言った。

汽車は無事出発した。青森く盛岡く一関く岩切く仙台く郡山く白河く黒磯く西那須野く宇都宮く大宮く上野と十二の駅を二十六時間四十分で走る。

上野駅に到着したのは次の日の夕方だった。上野駅は人で溢れていた。山の中から出て来た三人は、ちょっと違和感を覚えながら社長との待ち合わせの場所へ急いだ。駅を出て待ち合わせの場所に立っていると、プー、プーと車のクラクションが聞こえた。

「社長が来られたべき」と曾根が言った。

車が前に止まると、ドアが開き社長が下りて来た。

「山崎はん、よく来てくれました。明日の午前九時に、北海道調査課の山木重文はんと会えるさかいにね。準備は出来てるね」と神沼宗次郎は言った。

「準備は万端でござす」と山崎は言った。

「旅疲れもあるやろう。今日はゆっくりしやっせ。旅館まで案内しよう。車に乗りたまえ」と神沼は言った。

その日は、軽い打ち合わせをし神沼社長は帰宅した。三人は食事を済ませ早々に床に就いた。

翌朝は、快晴だった。

「今日は良い日になりそうでござす」と山崎は窓の障子を開け大きな伸びをした。

「そうですね」と田中も相槌を打った。

「社長が来る前に支度しとるか」と山崎は言った。

「はい」と田中が言った。

午前八時頃、神沼宗次郎社長が来た。

「山崎はん、準備は出来ているかね」

「社長、準備万端でござす」

「それでは、行きやすか」と神沼は言った。

三菱本社までは、三十分程だった。

三菱本社ビルは煉瓦造りの三階建てで、三階のワンフロアが三菱で、後は店子がぎっしり入っていた。三人は三階の応接室に、通されていた。

応接室は重厚な作りで、壁には初代岩崎弥太郎の写真と二代目弥之助の写真と三代目岩崎久弥の写真が飾られていた。部屋は二十畳程で、その中央辺りに大きな応接セットが置かれ、そのソファーに四人は並んで座っていた。

田中健二は、緊張していた。幕末から始まり明治初頭には、もう財閥の仲間入りをしていた三菱に俺はいると思うと震えが止まらなかった。

ドアが開いた。

「やあ、お待ちせ。神沼さん」と山木重文が言った。

四人は立って一礼した。

「まあまあ、座って座って……。どうですか。今回の契約にハン押す気になりましたか」

神沼は、札幌の北海道調査課の事務所へ再三通い融資の交渉をしていたのである。

「はい、決心着きました。宜しくお願いします」

「社長、どうということでしたい」山崎は小声で言った。

「良いんやす。山崎はん、もう決まったんだ」と神沼は、強い目力で言った。

「じゃ、社長を呼びましょう」

山木は立ち上がり、ドアを開け外の人間に伝えた。それから十分程で廊下に居る人が「社長がお見えになりまーす」と言い、五人は起立しお辞儀をした。

その後暫くして、久弥社長が顔をだした。

空気は緊張していた。お辞儀をしている四人の横を素通りして、向いの椅子に腰を掛けた。

「さあ、皆さんも腰を下ろして」と久弥社長は言った。

「今日は日和も良く、お会いできて嬉しく思います」と神沼は、頭を上げ言った。

三人も頭を上げ、座した。

「臨時北海道調査課の山木様からお話が行かれていますと思うのですが」と神沼は言った。

「聞いている。あの条件で良いのだね」と久弥は言った。

「はい」と神沼が言った。

明治四十四年十二月二十三日大夕張炭鉱株式会社に正式に資金を貸し付ける事になった。その内容は、まず八万円を年利八分で貸し、大夕張炭鉱株式会社所有の石狩国夕張郡登川村、由仁村地内石炭鉱区と後志国小樽区若竹町畑、市街宅地を担保し返済期間は明治四十五年七月一日より明治四十七年六月三十日までとした。その返済方法として出炭山許一トンに付七十銭を支払い、三菱に満五年間石炭の一手販売権を委託することになっていた。

秘書が書類を持って来た。お互いサインと印鑑を押し契約は成立した。事実上の三菱移転への前段階だった。

「今日はありがとう御座いました。宜しく願います」と神沼らは深く礼をして部屋を後にした。

「終わったわー」と神沼は言った。

「社長、良いんでござすか」と山崎は神沼に言った。

「良いんや。少し東京見物でもして帰るといい」と神沼は言った。

「はい、そうさせて頂きますたい」と山崎が言った。

「旅館まで送ろう」と神沼が言った。

「はい」と山崎が言った。

「山崎はん、坑夫を増やして出炭量を上げるんや」と神沼が言った。

「同感でござす。でも、なかなか技術を持った坑夫が手に入らんたい。上手く行つてないでござす」と山崎が言った。

「技術者はどうでもいいんや、頭数や。掘れる人間なら誰でもいいんや」と神沼が言った。

「そうすると飯場を増やさないといけんたい」と山崎が言った。

「飯場を増やすのは、構わないから急いでなあ」と神沼が言った。

「分かり申した」と山崎が言った。

そうこうしているうちに、旅館に着いた。

山崎らは社長にあいさつして別れた。

「やっと、終わりましたねえ」と田中健二が言った。

「いや、新しい局面さ入ったと言えるたい」と山崎は言った。

田中は、この大夕張と言う地が、これからどのように変わって行くのか考えた。それは、これからの日本と言う国の行く末でもあった。

「さっ、どこさ行きたい。まず、浅草の浅草寺でも行ってみ申すか」

「はい」と田中と曾根は言った。

三人は二泊して、三日目の朝十時四十分上野発東北本線へ乗り込んだ。

田中は、汽車の中で、何故か人夫の事を考えていた。『あそこで働く人たちは、何を考えて穴を掘っているのだろう・・・』

炭坑夫の雇用状態は、劣悪であった。飯場頭（親分）は錦坑に下川原松太郎、若葉坑に別所多次郎、駒啓次郎（いずれも自坑夫交際所）同じく若葉坑に小寺菊太郎（渡り坑夫交際所）らがいて三百名近い者たちの労働力を会社に提供していた。

会社が何人人員が欲しいと言うと、親分たちは募集に出かけ、山に連れて来て自分の飯場に入れる。労務管理の一切は親分にあった。会社は誰が入った、出たと頭数を数えるだけで、面倒な方法は取らなかった。

飯場の建物（交際所と呼んだ）は、会社が建てて飯場頭に貸付、稼ぎに出た坑夫一人一日について出稼ぎ手当五銭を会社から貰う仕組みで、日常の飲み食いは飯場頭のさじ加減一つに握られていた。

それ故に、飯場の者に対しての気合の掛け具合や、やきの入れようはすさまじかつ

た。中間の搾取も思うがままで、儲けもかなりあった。

健康保険や労災法も無いうえ、怪我や病気をしても救済の方法が無かった時代だった。働く者は自分で自分を守る為の自衛手段として、自然発生的に鉱山で働く者が中心になって、友子制度の発展を促した。

飯場制度は、親分子分の関係を固く結びつける結果にもなり、『おなじカマのメシを食った仲間ダ』と言う言葉は、炭坑の終わりまで長く言いつがれていった。

また、この飯場制度をタコ部屋制度とも言っていた。何故タコ部屋と言うかといえ、蛸の足のように死んでも直ぐに新しい足が生えて来るところから来ている。その名の由来通り、坑内事故で人が死ぬと何処からともなく人が連れられて来て、その亡くなった寢床で寝起きしていた。

勿論過酷な労働の中で脱走する者も少なくなり、捕まると見せしめに袋叩きに合いコンクリート缶に入れ放置し息絶える者は病死として連絡されていた。

熊一は、七人兄弟姉妹の一番上で、秋田県の能代から人夫の募集を聞いて応募した。去年は冷夏で、作物の殆どがやられてしまった。熊一の家は、田んぼ二反、畑一反で九人が年貢を納めて食べて行くには厳しかった。そこで、熊一は人夫に応募してお金を貯めようと思った。

熊一は募集の人と一緒に、白い飯が食いたいと思い、秋も中頃に山を越え馬車で青森まで向かった。

村の人たちは「北海道へ行くってさ。人買いに騙されたんだべ」と噂した。

熊一は十九歳だった。体は丈夫だがっしりした体だったので体には自信があった。

「がっぽり稼いで田舎に帰ればいい。それに白い飯がたんまり食える」と募集人が言った。

「おら頑張るだ。頑張って年季終わって帰るべ」と熊一は言った。

「うんだ、うんだ。そのいきだべ」

熊一は、青森の連絡船に乗っていた。そして、故郷に残した父母兄妹の事を思っていた。

「さっさ、少し寝るべ」と募集人がいった。

熊一は少し横になった。船は少し揺れたが、無事に函館へ着いた。そこから、汽車に揺られ夕張へ入った。

「ここが夕張だ。凄い機関車だべ。これで、石炭を引っ張るんだ。大夕張はもう直ぐそこだ。この列車に乗って行く。さっ乗った乗った」

列車は山の密林の中を走った。

『こつたら、山に町があるんだべか』と熊一は少し心細くなった。

列車は、汽笛を数回鳴らした。そして、大夕張の駅へ車体を付けた。

「ここが、大夕張だ。今日は良い天気だべ。凄い町だべさ。今日からここが、おぬしの暮す町だ。さ、飯場の親分のところまで行くべ」

「へえ」と熊一は、周りの建物を見ながら言った。

「ここは若葉坑の飯場だ……。別所親分は居ますか、佐野助が来たと伝えて下さい」と中にいた若い衆に言うと、若い衆が「親分、佐野助が帰りやした」と奥へ向かって大きな声で呼んだ。

すると奥から別所多次郎が現れた。

「やあーやあー、ご苦労だったなあ。こいつかい」

「へい、熊一と申しやす。秋田から来やした」

「そうかい、そうかい。疲れたべ。風呂にでも入って飯でも食べるや」

「へい、ありがとう御座いやす。熊一、親分に挨拶しろ」

「熊一だべ。宜しく願いますだ」

「そうかいそうかい。ささささ、上がってくれ」

「風呂に入ろう。明日からは仕事だべ。旅の疲れを取るべ」と佐野助は言った。

「へえ」と熊一は答え、足を洗って奥の風呂場へ連れていかれた。その夜は風呂と白い飯が食べられた。

契約により、募集で来たものは、年季が明けるまで帰れない。岩見沢の周旋所から買われて来たものもある。熊一のように稼ぎに来たものは余りいなかった。だから、周りには、騙されて来たと言われた。

組の飯場は七十四人いて露頭炭を掘っていた。太陽が出ない内に出かけ、星を見ながら飯場へ帰るといった過酷な労働が続いていた。

逃げる者もいるので、到着すると服は帳場（大番頭）に預けて真っ赤な腰巻と上衣一枚で仕事をする。北海道の開拓の土方や坑夫はみんなこうして働いていた。冬は寒さで人が倒れた事もあった。

寝床は、板の間だった。それに掛け布団だけだった。枕は長い角材一本で、その

上に頭を乗つけて寝る。飯を食べ終わると、観音扉を表から閉められて、かんぬきして錠を掛けてしまう。隣の幹部部屋では、寝ずの番がついていて、逃げ出そうとするものを見張っている。こうなれば監獄部屋だと熊一も思った。流石に騙されて来たんだと思った。

東の空がしらむ頃、「みんな起きろー」と角材の枕を鶴嘴で殴られた。頭が割れる程痛い思いをした。だから、熊一は三日目頃から早めに目覚め頭を少し浮かせて置く事を覚えた。

熊一が来て一年程経った頃、年季が終わった七人が帳場に送られて飯場を出て行った。熊一は『俺も早く年季開けてかえりてえなあ』と思った。

ところが四日後位になると、山を下りた筈の七人が、気を失ったように部屋の隅の板壁に寄りかかっている。山を下りる時着ていた服も脱がされて元の真っ赤な腰巻を付けていた。

「おい、どうしただ」と熊一が聞いても醜態をさらしてすっかり伸びていた。

寝る時熊一は、何時も隣りに寝ていた年配のおやつさんであればどういう事かと聞いてみた。

「あれか。あれはなあ、借金が無くなった者をなあ、帳場が料理屋に連れ込むんだ。んで『今まで稼いでくれてありがとう』とご馳走するのさあ。でもそんなことはありえないべさ。ご馳走する振りをして女郎と三日も四日も一緒に寝かせて、飯場で食べた事の無い、鳥の丸焼きや、銚子一本二十銭もするやつを飲まされるんだ。なんぼ金あっても駄目だ。料理屋のおかみが勘定を持って来て見て驚くんのだ。

合計が五十八円何がしにもなっている。女の線香代、酒代もピンハネしているとは夢にも思っていないだろうに。そして、正体がなくなると元の飯場へ戻されて借金も増やされ働かせれるんだ。

これを『やきなおし』って言うんだ。解った時には後の祭りだべ。二十円ちよつとのなけなしの金を払い、残りは帳場が立て替え、また借金をすることになるんだあ。そして前借一金何拾円と判子を押しして逆戻りとなるんだあ。

飯場で買った手拭や石鹸だって町より三割も五割も高いべ。労働力を手放さいように出来ているんだあ。自分が自分を食い潰しているようなもんだべ。蛸部屋とはよく言ったもんだべ。

俺も若い時分、同じ目にあっただあ。もう、ここからは死ぬまででられねえん

だ・・・。

さあさあ、明日も早い、頭にガキーンと来るぞ。もう寝るべ」

「うんだ」熊一はやっぱり騙されたんだ、と思った。

ある秋の日、何時もより早い時刻に枕を叩かれた、頭がガキーンとした。「さっさと起きろ！」と帳場の男が言った。

現場に着いて、何時もなら直ぐに石炭を掘るのに、その日は違う空気があった。みんな張りつめていた。夕張岳が朝もやで揺らいでいる。皆がひそひそ話を始めた。「おい、昨日の夜十人が逃げだ。そして山越えようとした所みんな捕まっただと」誰が言うともなく耳に入ってくる。

前の方を見ると、赤い腰巻もボロボロになり顔とも腹とも言わず、ところかしこが青紫に腫れ上がった体で十人が立たされていた。

その中に熊一とおやっさんの顔もあった。そして、帳場頭が「おい、お前やれ！」と若い帳場の男に鶴嘴を渡した。若い男は、顔が青ざめ震えていた。

「どうした！やるんだ！」帳場頭の命令は絶対だ。若い男は鶴嘴の柄で力一杯殴り付けた。「わー、勘弁してくれ。痛いよう。勘弁してくれえ」逃亡者たちの悲鳴は山に木霊した。

帳場の男の手は休まらなかった。その後から次から次へと帳場の若い衆たちは鶴嘴の柄で逃亡者たちを殴り付けた。もう、顔は血で赤く黄土色に腫れ上がり、立っていられなくなった逃亡者は横たわり、それでも殴られた。

「ほらほら、動かなくなった奴はコンクリート缶（今のドラム缶）に入れろや」と帳場頭が言うのと次々とコンクリート缶に動かなくなった逃亡者を突っ込んで行った。

熊一は、まだ立っていた。おやっさんが熊一を抱きしめ鶴嘴の柄から守っていた。

「おっとうおっかう、オラもうだめだ！。堪忍してくんろ。やそ吉・みね・うめ・一太郎・定吉・しほ・・・」おやっさんは熊一に耳打ちした。

「死んだら、山で死んだからってズリ山へ埋めるんだ」と言った。

熊一を守っていたおやっさんも地面に倒れた。熊一も顔から血を流し地面に倒れた。それでも、熊一は殴られた。そして、コンクリート缶へ投げ込まれた。

「いいか、おめえ達も逃げようなんて考えるとこうなるんだ。よく覚えとけ。さっさっさあ、全員仕事につけや。若い衆みんなを仕事場に連れてけー」と帳場頭が言っ

た。そして、帳場の若い衆四人を残し全員仕事場へ向かった。

「おめえら、こいつらをあのズリ山へ埋めてこい。もし息がまだある奴がいても全員埋めて来い。どうせもう使いものにならんべ」と帳場頭がいうと、若い衆は「へい」と言って作業に入った。

数日後、大夕張炭鉱社の人扱い窓口には、先日十名が病死したと別所多次郎は報告した。大夕張炭坑社と人貸の間には、一線が引かれていた。炭坑社はただ、何人病死と人名帳に記するだけで後の処置は、飯場頭に全て任されていた。

そんな中、大夕張炭鉱社は、経営のいきづまりに困窮していた。人夫を確保するのに躍起な大夕張炭鉱社は、今回の十人の病死を重くみて各飯場頭に人夫の増員を支持した。

「どうたい田中君。増産出来そうかい」と山崎は聞いた。

「はあー、これ以上は無理ですやろなあ。人手から言うても限界だと思いやすと田中は言った。

「人夫に関しては、各飯場頭に通達を出しているんだが……。それよりも、社長が何を考えているのかさっぱり解らん。人手は何とかするけん。三菱が技術陣を投入し経営に参画してから、もう四年が経つ。もう無理なのかもしれないなあ」と山崎は言った。錦坑と滝の沢坑を明治四十五年に中止してから早四年が過ぎていた。そして、とうとうその日が来た。大正五年一月二十四日大夕張炭鉱株式会社は精算人申し入れにより主軸になっていた債権者の三菱合資会社が時価以上の値によって鉱区、地所その他一切で百六十二万五千円の金額で大夕張炭鉱株式会社を買収することを決定した。

大正五年一月二十六日若葉坑などの大夕張炭鉱株式会社所有の鉱山は三菱合資会社大夕張炭坑と改名し稼働する事となり、炭坑長に松隈三郎が就任した。

買収鉱区は夕張郡登川村大字大夕張川字夕張山などの採掘権や試掘権で、譲り受けた建物は事務所八棟、社宅二十棟、坑夫長屋七十四棟、倉庫八棟、工場九棟でそれまでかなり大規模な採掘が行われていた事を見る事ができた。

三菱社はさっそく改革に取り組んだ。松隈三郎は、労働時間は坑内実働八時間、坑外十時間、と制度を確立し、採炭充填二交代制、掘進の二、三交替（坑によって違った）仕操、修繕は三交替制で、女坑夫の新採用を見合わせ、だんだんと減らして行く事にした。また、山札（金券）を全面廃止した。これは当時としては驚くべき事

だった。

三菱に大夕張鉱山が渡った事で、坑夫たちは、涙を流しながら万歳三唱をした。そして三菱は同年一月、まだ開発が行われていなかった北部大夕張炭層調査を本格化した。

鉄道については、大正七年四月三菱合資会社から独立した三菱鉱業所が同年六月十四日譲渡認可を受けて操業を継続した。大夕張炭鉱の職制については、運転管理を鉄道院に委託し、軌道保守については工作係、乗降客の扱いは労務係が担当していた。しかし、乗降客に関して施設も悪く危険が多かった為、乗車勘合証（乗車券）の裏には『人命を保証しない』事が注意書きとして書かれていた。

大正七年七月、山崎忠志は山を去った。他の連中も皆山を去った。しかし、田中健二と安田誠は三菱に拾われ北部大夕張の調査の一員として残っていた。藤間康弘も出納係としていた。

「来月から北部大夕張の調査に加わる事になりました、安田はん」と田中は言った。「あんさんもか。実は私は一週間後の調査に加わる事になったさあ」と安田はいった。

「そうですねー。お互い頑張りましょう」

「そうだ田中はん、藤間はんも出納係として残る事になったとさあ。どうだい、三人で久しぶりに飲まないかい。山崎はんは居なくなつたが、これから三人で力を合わせて頑張ろう。懇友会と行こうじゃないか」と安田が言った。

「せやせや、ほな、やりましょう。やりましょう」と田中は言った。

「そうと決まったら、さっそく今晚やりまひよ。場所は青葉壮のあの場所で……」
「分かりましたあ」と田中が言ってその場を別れた。

田中らは、改まって懇友会などは開いた事がなかった。仕事の煩雑さもあつたが、そんな機会が余り取れなかった。田中は、久しぶりの飲み会に浮かれた。そして午後七時に、三人は集まった。

「山崎はんが居ないので、前回のような肴にはならないが、これでも頑張ったよ」と安田が言った。

「いやいや、これで十分ぜよ」と藤間が言った。

「そうそう……」と田中は言った。

「まずは、乾杯しまひよ」と安田が言った。ーカンパニー。

「あの時は、随分と大夕張炭鉱への夢を語ったなあ」と安田は言った。

「そうそう、山崎さんなんて命掛けてるって言ってたあ。でも、炭坑は日露戦争後から変わってしまった」と藤間が言った。

「いやあ、何処もあの時は、そうだったです」と田中が言った。

「そやけど、京都時分から炭坑夫は大変だったみたいだ」と安田が言った。

「そうやそうや、三菱が入る前までは、頭数を揃えるのに、炭坑の事何も知らない連中を東北地方から引っ張ってきてさあ」と田中が言った。

「人さらいみたいな事やっていたっていうぜよ」と藤間が言った。

「今は違う。三菱が変えはったんや」と安田は言った。そして、言葉を続けた。

「通洞が完成したら、多分三菱は北部大夕張へ全精力を傾けるやろ。南部大夕張は、小さくなる。北部は、三菱の元、百年は続くだろうなあ。これからの産業は、石炭なんや。北海道は、栄えるぞう」

「その通りやす」と田中は言った。

「お前はどのようなつもりだい。残るのかい」と安田は言った。

「はあ、それがまだ解らないのです。悩んでいます。故郷へ帰ろうかとも」と田中が言った。

「おぬし、奈良だったよな。何か仕事口でもあるのかい」と藤間が言った。

「いやあー、お袋が帰って来いって……。実は、遅まきながら見合いの話がありまして……」と田中が言った。

「何、見合いやと。それは目出度い。ところでお前は幾つになったんや」と安田が言った。

「三十七です。京都合資会社から炭坑を担当させてもらった時が二十五歳ですから、それから十二年経ちました。僕もそろそろ身を固めようかと……」と田中は言った。

「そうかあ。良い話じゃないか。それで、奈良へ戻るんやすか」と安田が言った。

「そのつもりや。通洞作業が始まる前に行つて来ようと思つてやす」と田中が言った。

「そうすつと、近々に行かねばだめだな」と藤間が言った。

「そうなんです。明後日位に行つて来ようかと……」と田中は言った。

「で、戻つて来るのか」と安田は言った。

「はいそれは・・・、通洞を通すまではと思ってます。それからの事はまだ考えてまへん」と田中が言った。

「そうかあ。嫁かあ。俺は、山を開拓して来て嫁の事は少しも考えていなかったなあ。もう四十だ。京都に子供が二人だ。単身で山を歩き回って来たやすが、わしも、通洞が通じたら考える事になっている」と安田が言った。

「それはえらいことです。安田さんに子供が居たんですかあ」と藤間が言った。

「おぬしは、どうするつもりだ」と安田が言った。

「わしは、この町に残ろうと思つとりますけん。今三十九歳ですが、実は事務官の娘のお富さんと、良い中でして、結婚しようかと考えています」と藤間は言った。

「へえー、それは知らなかったー。あの三菱の事務官の所のお富さんとねえ。藤間も頑張ってるじゃないかあ。出身は、土佐だったよなあ。土佐には戻らんのか」と安田は言った。

「やー、通洞が開通したら、お富さんを連れて行って来ようと思ひます」と藤間は言った。

「そうやすか。皆さん色々考えているんですね」と田中がいった。

そんな話で夜は更けていった。

「明日も早いんや、そろそろ乾杯して終わらまひよ。それじゃあ、田中はんから・・・」と安田が言った。

「それじゃあ、良いですか。我々の未来に、そしてこの町にカンパニー・・・」

北部大夕張の調査は、明治四十四年三菱が大夕張炭鉱株式会社に融資した時から、開始されていた。北部大夕張の開発は急ピッチで進められ、若葉からは三里の山を越え、鹿島沢、香取沢の探炭調査に入山している人々の食糧を運搬していたが、運搬を請け負ったのは宮崎万吉だった。夜明け前、五頭の馬にカイバをやり山登りの準備に取り掛かった。

冬になると雪の山道は、人も馬も寒さで動けなくなるので特に酷い。その日は大雪だった。大雪になると十日も山へ上がれなかった。

そんな中万吉は、入山者の食糧がもう無い頃だと思い、いてもたってもいられなかった。

「少し落ち着いたらいいべさ」と妻のお幸に言われながらも『ご苦労さん、ありがた。

とう』と声を掛けてくれる山男たちの顔が頭の中に浮かび無精に気持ち騒ぎ何とかしなければと思うのであった。

納屋から馬を引き出し、轡をはめ米を二表つけ、首輪には大きな鈴を二つ付ける。宿舎へは片道で五時間以上は掛かる。山に上がって家に帰るのはたいてい夕方五時か六時になった。ダンツケ馬は建築資材や機械類を運び始めた。

南部大夕張の二股市街を出てダニ峠を登りつめる。なだらかな台地に下りて来る坂や沢の山道を通るのだが、荷のたくさんつけた馬は、この箇所を一気に台地に出る事はできない。その為、二、三回馬を休ませながら喘ぎ喘ぎ登り下りする。途中には、笹ぶきの屋根だけのバラックのトマヤが建ててあった。そこで馬と共に小休止する。作業をする者は、幾つものテントを張った幕舎で寝泊まりしている。作業に出た後、幕舎の中に旨いものの匂いを嗅ぎつけた熊が、テントを破ることもしばしばだった。馬も何頭かは熊の餌食になっていた。

山岳地帯には珍しい一大台地でもあった南部、北部を遮る函岩の辺りは、人馬一体となつて急勾配な道を注意深く一足一足進むが、足を滑らせて函岩の激流の川に真つ逆さまに馬が落ちることもあった。そこで函岩には、馬頭観音が立てられていた。シューパロ川本流に注ぐ険しい沢も函岩を越してからも八つあって、そのいずれも本流に入る河口は切り立つように高く、人が容易に踏み込めるところではない。北部への道は川沿い川沿いと往復せざるをえなかった。そして、八百五十と言う山の裏側を通つて、鹿島沢に下りて行く。北部大夕張開発が正式に通洞案として決定したのが、大正五年雪解けが進んだ春のことで、山木重文の号令と共に始まった。

大正七年から八年に掛けては東北帝大教授矢部博士や三菱今井技師らによってボーリング調査が行われた。大正九年に常磐沢、同年九月に香取沢、同年十月に鹿島沢、北卸沢、春日沢と行われて行った。

調査の主な理由は、若葉坑の主坑道が長くなりすぎて、エンドレスの距離を延長しなければならず、またその為の経費が掛かり過ぎた為だった。

この頃の探炭調査では、若葉坑から十二キロ山に入った地点の香取沢に合宿所を置き、ここから北部探炭調査が行われた。通洞坑予定日は、初音沢（別名：熊の沢）で大正十三年春から、鉱夫社宅六戸が建てられた。

建築資材や機械類を運ぶのは、ダンツケ馬によって二股市街からダニ峠（青葉峠）現二股ダムの旧鉄道トンネル上側）を通り、シューパロ湖畔亭付近に下り、川の浅

瀬を渡り（旧農場―現在湖の下から桜ヶ丘に抜ける）五時間以上も掛かって通洞の台地（鹿島小学校グラウンド）に野積みをしていた。途中ダニ峠付近はシューパロに注ぐ険しい沢だった。

昭和二年九月十五日、向田幸蔵夕張町長など多数の来賓主席のもとに、勝俣英所長司祭の通洞開鑿地鎮祭が大楚歌に行われ、本坑区域開坑の第一歩が踏み出された。鉄道工事は大井、梅原組、橋梁事業は札幌の橋本組が請け負い、腰に赤い腰巻をした土工夫の切り立った谷や川への挑戦が、昼夜を問わず行われた。工事は急ピッチでその形を作って行った。

十二月初旬からは通洞入口に建てられた（初音台）事務所、職員合宿、鉦夫合宿は早くも使用が開始され百四十人の男たちの生活が始まった。

感激の瞬間が近づいていた。昭和四年五月七日午後一時三十分大夕張の運命を担った通洞が開通した。測量誤差わずか二十センチ、掘進誤差一メートル、鹿島沢と通洞入口の両側から掘り進む事三千五十メートルの穴がポツカリと開いた中で山男たちは思わず万歳万歳と声を上げ、肩を抱き合って喜んだ。

十三日には、急ごしらえの祭壇に山海の幸を供え式典が行われた。炭山に住む者はみんな無事を祈った。

大正十五年十月から行われていた鉄道工事も昭和三年十月、南部大夕張と北部大夕張間が完成した。この間、昭和二年六月十日三菱鉦業大夕張鉦業所が美唄所管から独立し、昭和五年十一月十五日には、南部大夕張の全操業はコークス場を除いて全面中止、従業員は北部大夕張に移住した。南部大夕張は大夕張鉦として、明治四十年に出炭を開始して以来二十四年の歴史に幕を閉じた。

田中健二と安田誠は、通洞にいた。

「やったな」安田が言った。

「新しい町が出来るんですねー」と田中が言った。

「どうするんやこれから」と安田が言った。

「もう。五十になりました。妻も子供も居ます。一区切りに、なると良いのですが・・・」と田中が言った。

「そうやなあー」

「安田はんはどうするんですか」

「まだ、分からへんが、この町を出ようと思ってる。余りに色々な事がありました。」

少しのんびりして色々な事考えてみたいんや」

「そうですかあー。淋しくなりますねえ。山崎はん、今頃どこで何をしているんでしょうね」

「こないだ手紙が来たんや。なんでも九州の炭山へ行ったようだ」

「そうやすかあー」

「まだ解らんが、わしももしかしたら、九州へ行くかもしれんなあー。来ないかと言う手紙だったんや」

「九州は随分と遠いんですねえ。もう会えまへんかあ」

「いや、また会いまひよ。大夕張は金の成る山や、百年は掘れるだろう。また会えるさあ」

「そうやなあ」

「一週間後、山を下りようと思っている。体に氣い付けて頑張つてや・・・」

「へー、安田はんも・・・」

田中は思った。大夕張の始まりを知っている人間が誰も居なくなつて行く事を淋しく思った。

その後南部大夕張、北部大夕張と呼ぶのは両方とも大夕張と付くので紛らわしいという事で南部大夕張を南部、北部大夕張を鹿島と改名し閉山までの四十四年間その隆盛は、誰にも止められず続いた。

田中健二は、思っていた。『安田はんも皆行つてしまった。俺も五十だ。女房も子供も此処にいる。もう、決めなければなあ』

「あんた、隆夫が泣いてますよ。はやく」

紙飛行機、作つてやって下さい」と里が言った。

「あつ、わかつた、わかつた」と田中が言った。

田中健二は、奈良から連れて来た嫁の里と三人の子供らと鹿島の富士見町で暮らしていた。子供は、長女の雅子と長男の健三、次男の隆夫を授かっていた。

「隆夫、ほら飛行機だ。これは、飛ぶぞう・・・」

「おとうさん、僕も飛ばすー」

「よおうし、こう持つて、一二の三・・・」

紙飛行機は、部屋の中を旋回して飛んだ。田中はその軌跡を追いながら、走馬灯のように、始まりを思い出した。

そして、炭鉦マンの一技師として町の誕生に寄与出来た事を誇りに思った。そして、この町の始まりを知っている者として、この町の行く末を見たいと思った。

「旦那はん、御飯が出来ましたよ」

自分にとって新しい時代が、始まるような気がした。幾千もの軌跡が、此処に在る。その軌跡を忘れず、子供たちに語り継いで行かなければならない。家族と共に、生きて行く事を田中は考えていた。

「隆夫、御飯だって、雅子、健三、飯だ飯だ、食べるべ食べるべ」

田中は、ようやく決心が付いたような気がした。この町で、子供たちの未来を見届けようと思った。そして、この町のはじまりから受け継ぐ山の男の心意気を見届けようと思った。